

歴史の旅

廈門・泉州・香港の辟邪呪物調査の旅から

関西大学文学部教授 坂出祥伸

辟邪呪物（へきじゃじゅぶつ）と「気」、何の関係もなさそうに思う人が多いことであろうが、私は「天地人はみな一気」という考えに立っているのであって、だから呪符も単なる紙切れではないし、沖縄の「シーサー」によく似た金門島の風獅爺（フォンシーイエ）も、屏風（ピンフォン、沖縄ではヒンブン）も、すべてが「気」にかかわる辟邪呪物なのである。

ところで私は今、3年間の科学研究費を得て、台湾や中国大陸、東南アジア、沖縄の辟邪呪物の収集調査を行っている。昨年夏は台南の安平区や高雄近くの東港鎮、金門島で調査を行ったのだが、都市化、近代化の波に洗われて、辟邪呪物はめっきり減っている。ただ、獅頭牌、八卦牌や倒立鏡などは今も門の上に掛けられている。安平区には刀剣型の屏風すなわち刀剣屏や石造あるいはコンクリート製の大きな照壁（ジャオピー、屏風形だが移動できない）が寺の前に据え付けられている。これも邪気払いのためである。あまりに大きな照壁は、そこに彫刻されている麒麟や蝙蝠の図柄に圧倒されて照壁とは気づかない。これらはいずれも邪気払いを目的とする辟邪呪物である。台湾でも今はこの安平区ぐらいにしか残っていないだろう。しかし、台南の人々の先祖は、海を隔てた大陸の福建省から渡来したのであるから、きっと福建南部、いわゆる閩南には今も伝承されているかもしれないという推測を立てて、昨年12月24日から今年1月2日にかけて廈門・泉州方面を歩いて回った。以下はその報告の一部である。

廈門で：

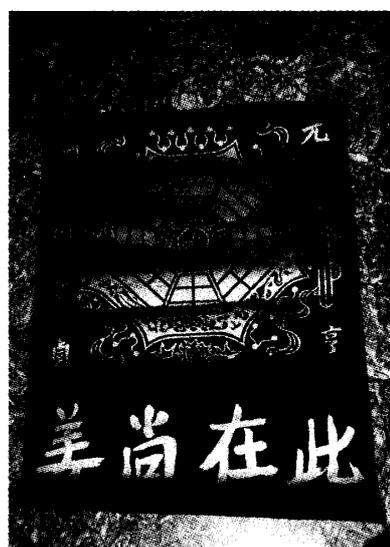
廈門空港からタクシーで市内に入って、先ず驚いたのは近代的ビルが林立していることであった。持参した『台南市民俗辟邪物図集』（台南市政府、1990）をガイドの李建華氏に見せて、こういうもの

を見たいといったが、廈門市内にはないという返事だ。また、道教の宮廟をいくつか挙げて探してくれるよう頼んだが、これも取り壊されたり、移転されたりで探すのは難しいという返事だ。そこで、翌日（12月25日）は、海滄大橋を渡って先ず海滄鎮にある青礁慈濟宮に案内された。ここは保生大帝すなわち呉真人（呉本、ごとう、北宋の名医）を祀っている。台北にも孔子廟の近くに保生宮があるので、保生大帝の名はご存じの人もあろうが、呉真人はこの近くの白礁村の生まれである。この慈濟宮は、台湾の信者の多額の寄進によって再建されたものである。ここでは、赤い紙の上部に八卦図を描き三清の印、勅令保生大帝の文字を書いた木版の呪符とプラスチックの板に宮廟内にある保生大帝像の写真のある護身符をいただいた。呉本はもともと、このあたりで医者として多くの人々を救ったので、死後、青礁に塑像が建てられて祀られたという。その後、祠廟が建てられ、祠廟の前から仙泉が湧き出て万病に効いたというような奇跡が起り、次第に多くの人々の厚い信仰を得るようになった。その信仰は閩南全体に、更に台湾や東南アジアに広がっていった。初め呉本は「英惠侯」「忠顕侯」のような儒教的な賜号であったのが、南宋のころには「慈濟真人」「普祐真人」「孚惠真人」のような道教的賜号に代わっている。この頃から、呉本の神格も次第に変化して医神から地方の守護神となり、道教的色彩も濃厚になっていったらしい。

なお、この廟の風水については、同行された研究分担者の先生が磁石を持参されていて完全な北坐南向と測られたし、また魯班尺で廟の門口の幅と高さを測られて、「興旺」「財進」の目盛りに適っていた。これらは全て「気」に密接に関わることであり、従ってこの宮廟の繁栄をもたらすことを示している。「気」が論じられる時、中国人にとっては「福

禄寿」の観念と密接に関わることとして考えるのであり、つまり、彼等の生活や人生に関わっているのであって、その点が日本人の受け止め方と根本的に違うのである。

さて、続いて案内されたのは、青礁村からほど遠くないが、龍海市に属する白礁村の慈濟宮である。ここでは呪符を木版刷りしている光景が見られた。また、その近くのかなり高い山の上には呉真人鍊丹の岩があり案内されたが、それは後世に作られた伝説であろう。翌日、廈門の西80キロほど、バスの時間にして2時間かかるところの都市・漳州に行くと、ここには古い街並みが残っていて、家々の門に色々な呪符が貼ってある。八卦の下に「此在尚姜」



(写真) とか「文王在此」と書いた赤い大きな呪符が多い。尚姜は太公望呂尚のことで、姓は姜、海辺に隠居していたのを周の文王に見出され、その亡き後は武王を助けて殷の紂王を滅ぼして周王朝の建国に尽くした。ただし、なぜ呪符に尚姜や文

王が用いられるのか、よく分からない。

この古い街並みには、今にも崩れそうな家が多い。すでに、ブルドーザーがあちこちで活躍して古い家を壊している。1,2年後には、すっかり景観が変わっていることであろう。そして、呪符もきっと少なくなっていることだろう。

漳州には道教協会があって、その事務所である慈恵宮に行って会長、副会長に会う。副会長は呪符を書くとき聞いたので、彼の書いた呪符を見せていただいたが、それは木版で刷ったものであり、ただし、その図柄は彼自身の考えにもとづいている。その授け方や効能などを話してくれた。

12月27日、28日、29日は泉州を調査したが、漳州ほどの収穫は得られなかったので、ここでは省略する。

廈門、泉州では、共産党の強力な宗教政策のため、同時にいわゆる沿海地区であることから、華僑

からの投資による経済発展と近代化が著しく、旧市街の面貌はすっかり変化していて、台南で見られたような呪符や辟邪呪物はほとんど消滅していた。わずかに、やや奥地になる漳州に残存していただけであった。

香港で：

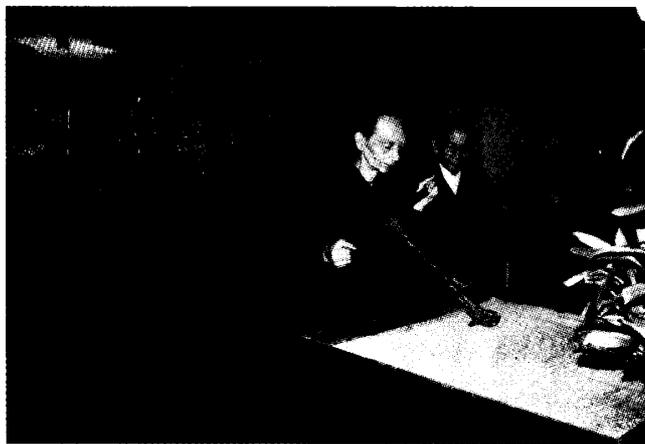
12月31日は、九龍半島新界・屯門の青松觀、粉嶺の蓬瀛仙館、黄大仙廟、九龍塘・律倫街の省善眞堂を訪問し、1月1日は、澳門（マカオ）を観光するというように、呪符についての期待は全然なくて、道教全真教の道觀を見学することのほかには観光をも兼ねていた。

全真教については、台湾にはほとんど流入していないが、北京の白雲觀という全真教の大叢林は2度見学したことがあり、また小柳司氣太の名著『白雲觀志』によっていくらかは知っているが、北京以外で見た全真教道觀は30日に廈門で見学した太清宮だけである。したがってこれまで、私は全真教にはなじみが薄く、この派でも呪符を発売しているとは思ってもよらなかったのであるが、青松觀でも蓬瀛仙館でも道士が古い呪符を取り出して見せてくれた。それはそれで興味深いものではあったが、ここでは省略して省善眞堂で見た扶乩（フーチーと発音する。また、扶鸞とも称される）という日本の「こっくりさん」に近い占術を紹介しよう。この扶乩は、「氣」にもとづく占術であるから、人体科学会の会員にも知っていただきたい。

全くご存じない方も多いと思われるので、先ず、『「道教」の大事典』（新人物往来社、1994）の志賀市子「扶乩」の項目の説明を引用しておく。「扶乩は中国では非常に古くから行われてきた降神術の一種である。通常、桃枝や柳枝で作られたT字型あるいはY字型の乩筆（けいひつ）を一人か二人の乩手で支えもつ。神霊が降臨すると乩筆が動き、砂を薄く敷いた沙盤の上に文字や記号が描き出される。これを乩手自身あるいは側に控える第三者が読みあげ、書写して神の乩示（けいし、お告げ）とする。書写された乩示は普通、五言あるいは七言の漢詩の体裁をとっている。信者たちはそれに解釈を施し、神からのメッセージを読みとるのである。」

私たちが省善眞堂で見た様子は以下のものであった。先ず、信者が紙に占ってほしいことを書き、それを記録係の女性に渡す。それを乩手の側にいる

男性（唱鸞）が乩手に告げる。そこで、乩手（後でいただいた名刺には「鸞生」とあった）がT字型の乩筆を持ち、乩手が乩筆を動かして一字ができると、それを側にいる人（唱鸞という）が読みあげ、さらに記録係（録鸞という）が決まった形式の紙に記録していく（写真）。乩手の乩筆が何度も動いて



一通りの乩示が終わった後に、文章になったものを録鸞が問者に渡していた。私の場合は、中国語で占ってほしい事柄を書いたのだが（内容は省略）、録鸞から渡されたのは、こういう文章であった。「男者流年逢双冲心思有失不安（一字抹消）詳(?)。女者性強多善变化。祇有一條是真心。愛護有加能満足。自然回心扱(?)報)君恩。不為己性有碍阻。不為相讓氣難忍。有此原因应有改才是真愛不受疑是也。庚辰年十二月初六日」と。おおよその文意は分かるが、意味不明の箇所もある。これに要した時間は10分ぐらいか。

この扶乩のメカニズムについて、志賀市子『近

代中国のシャーマニズムと道教』（勉誠出版、1999）の75頁で、多くの乩手は「氣」の概念で説明すると述べている。「氣」が頭から入ってきて乩筆を動かす、そこには「感応」の感覚が生じるとも述べている。

この扶乩の歴史は古いが、道教との関わりは非常に深く、梁の陶宏景の『真誥』20巻は、扶乩のお告げを集めたものともいえる。その後、扶乩は宋時代になると、読書人や官僚の間でも重視されらしく、『夷堅志』には科挙試の前に合否を占った記事が見られるが、明清時代には特に盛んになり、士民を問わず行われたらしい（合山究「明清の文人とオカルト趣味」荒井健編『中華文人の生活』平凡社、1994）。道教では全真教竜門派に取り入れられたようである。ヴァイルヘルムがドイツ語訳した『太乙金華宗旨』は、今や瞑想を説く中国の古典として広く知られているが、これが実は清朝初期の全真教竜門派系の太乙法派の扶乩集団の乩壇（道壇）で行われた扶乩によるお告げを集めた書物であるということは、すでに道教研究者の間では常識になっている。詳しくは、森由利亜『『太乙金華宗旨』の成立と変遷』（『東洋の思想と宗教』第15号、1998、早稲田大学東洋哲学学会）や、エスポジト・モニカ「金蓋山龍門派における『黄金の華の秘密』」（*Conoscenza e Interpretazione della Civirta Cinese*, Roma, 1996）などを参照されたい。

扶乩についての詳細はともかくとして、私には省善眞堂での扶乩の実見は、改めて「氣」の意味を考えさせられる有益な体験であった。